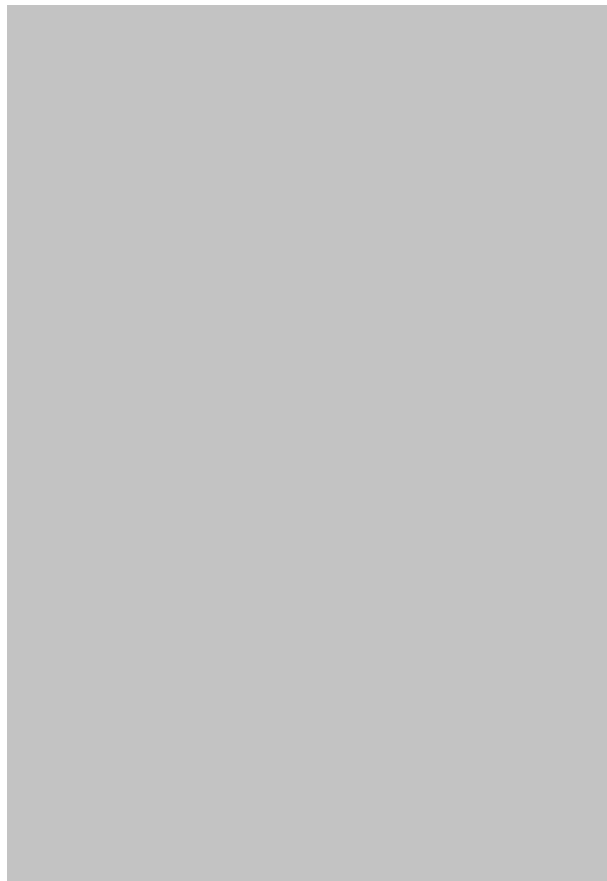


原弘

《在外日本作家展―ヨーロッパとアメリカ》展 ポスター(B2) 印刷原稿》



東

京国立近代美術館が一九五二(昭和二十七年)年に開館した後、二十三年間にわたって展覧会ポスターを手掛けていたのが長野県飯田市出身のグラフィックデザイナー原弘^{はらひろむ}です。開館六〇周年を迎えた二〇一二年に「原弘と東京国立近代美術館―デザインワークを通して見えてくるもの」展を開催しましたが、その準備を進める中、当館の倉庫の片隅で今回ご紹介する印刷原稿が偶然にも発見されました。

印刷原稿は、デザイナーと印刷会社の間で取りかわされるもので、ポスターが完成すると通常は破棄されてしまいます。なぜ当館に保管されていたのかは謎のままですが、完成された印刷物が出来上がるまでの制作過程を示す貴重なもので、原弘の思考の痕跡を垣間みることができます。

原弘が手がけたポスターには、展覧会に出品される作品図版を使ってレイアウトしたものが多くありますが、文字だけを使ってムードをあらわしたポスターも制作されています。この作品は、フランス、イタリア、ドイツ、スペイン等のヨーロッパと、メキシコを含むアメリカで活躍していた日本人作家の作品を紹介する展覧会ポスターの印刷原稿で、国名をあらわす文字の部分は、レタリングを駆使して構成した紙を手で破って貼りつけています。原稿内には「英文はこの紙に貼ったままを

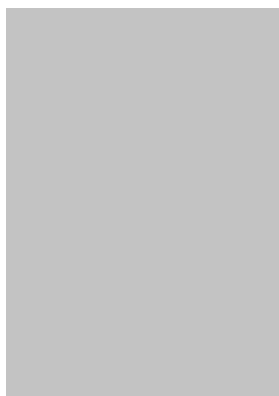
版下とする」との記載があり、完成されたポスターを見ると破れた紙のふちのギザギザな部分がそのままいかされています。

このような紙を破って構成するデザインは、この頃、原弘が繰り返し手がけていた手法で、思い通りの形になるまで何度も紙を破り続けたそうです。また、展覧会のタイトルや会期などの文字情報は、基本的に既製の活字は使わずにその都度書き起こしていました。

実際のポスターは、シルクスクリーン印刷によるグレー地に墨、青、赤、緑の五色刷りで、国名の英文は白抜き文字であらわされています。原弘の作風は、余白を重視して堅実なレタリングとレイアウトの手法に特色が見られますが、この作品もその好例といえるでしょう。

(工芸課客員研究員 内藤裕子)

当館は、一九六七(昭和四十二年六月)に「国立近代美術館」から「東京国立近代美術館」に名称が変更され、一九六九(昭和四十四年)年には、京橋から現在地の竹橋北の丸公園に移転した。



「在外日本作家展―ヨーロッパとアメリカ」展 ポスター (B2)

原弘(1903-1986)
《「在外日本作家展
―ヨーロッパとアメリカ」展
ポスター(B2) 印刷原稿》

1965年
紙、鉛筆、カラーチップ
79.0×54.7cm
平成24年度寄贈